様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成 23 年　6 月 25 日現在

機関番号：32690
研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2008～2010
課題番号：20500232
研究課題名（和文）日本近世の都市近郊農村における経済情報とその管理に関する基礎的研究

研究課題名（英文）Economic Data and Their Conservation in Suburban Agricultural Villages in Pre-Modern Japan

研究代表者 神立　孝一（KOICHI KANDACHI）
創価大学・経済学部・教授
研究者番号：60169795

研究成果の概要（和文）：近世の都市近郊農村が収集する経済情報は、中央市場における各種の相場や売買の情報だけではなく、その地域の市場における様々な情報に関心が高いことが伺えた。それは自らの農業経営や年貢納入の際に関係してくる、地方市場における相場等への対応であった。様々なネットワークを活用しその情報を個別的な家や村自体に収集することがなされたわけである。このような事例が確認できたことは、大きな成果と言えるだろう。

研究成果の概要（英文）：Economic data collected by suburban agricultural villages in pre-modern Japan included market prices, purchases, and sales information for not only the central market but for the local markets as well. Decision making at the level of local markets for the management and taxes of agricultural products were significantly influenced by the collected economic data. Utilizing diverse networks, information was collected by individual households and entire villages. The findings of this study show the data collected and their conservation.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2008年度	1,600,000	480,000	2,080,000
2009 年度	800,000	240,000	1,040,000
2010 年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総　計	2,9000,000	870,000	3,770,000

研究分野：総合領域
科研費の分科・細目：情報学・人文社会情報学
キーワード：情報経済学

１．研究開始当初の背景

日本の近世は、市場社会を有する「経済社会」であったと指摘されて久しい（速水融・宮本又郎編著『経済社会の成立』岩波書店、1988 年）。全国的な商品流通網が形成され、信用制度の仕組みも高度に発達していた。しかしながら、経済情報の発信源たる市場を有する都市と、その情報の受け手である村落農民が、どのような情報を集め、自らの経済行動に生かしていったのかについては、ほとんど明らかにされていなかった。

２．研究の目的

本研究は、日本の近世すなわち江戸時代の情報に関する技術とその技術のもとに形成された経済情報システムについて、地方都市とそれを取り巻く村落を対象とし、両者の間での経済情報を発生・伝達・管理という視点から調査・研究し、当時の経済に関する情報環境とそのシステムの解明を目的とする。こうした情報の発生・伝達そしてその収集・管理という局面について、本研究では未だ公刊

されていない一次史料を中心に調査分析を行い、その目的を果たしたいと考えている。

３．研究の方法

本研究が対象とする経済情報の発生・伝達・管理と言う３つの段階は、密接不可分であり統一的な理解が必要であるが、同時にそれらは独自にして固有の体系を有するものと考えられる。したがって、具体的には３つの側面からの史料調査と分析が必要であるが、その固有な体系性を追求するため周辺諸領域の研究との照合作業が必要となる。

まずは、研究責任者が収集してきた村方文書史料の整理・調査を行う。一方で、公開されている史料も利用していく。収集した史料情報はデータベースを作成してこれを管理する。翻刻した史料に関しては、全文テキストデータベースとして蓄積することとする。そして、収集した史料から、経済情報を抽出し分析を行う。

また、近世における都市をできうる限り絞り込んで、その周辺農村に蓄積されている文書群の特色を探っていく。その上で、その地域において、どのような経済情報が蓄積されていったのかを分析することにした。

４．研究成果

近世における都市近郊農村に蓄積された経済情報が、予想を上回る量に上ることが判明した。ここで言う都市は、地方都市をさすが、そこで行われた経済行為に関係する情報、たとえば相場の高下や物価などについては、詳細に集められている。さらに、当時三都と言われた中央都市における経済情報も、かなりの頻度で収集されていた。その内容は多岐にわたるもので、当時の情報ネットワークが、広範に張り巡らされていたことを、明らかにすることができた。今後は、よりいっそうこうした情報を精査し、分類分けを行うことによって、当時の農村における経済生活をよりクリアに示せるものと思われる。

そこで、研究年次を追って、それぞれの段階で得られた研究成果を示してみたい。

⑴研究責任者が事前に収集してきた村方文書資料群、具体的には、武蔵国多摩郡梅坪村の「谷津英一家伝来文書群」を対象とし、谷津家に残存する全資料の目録化を進めた。谷津家は、近世の八王子宿からおよそ１里(約４キロ)に位置しており、その農業経営や日常生活において、八王子市場と強い結びつきがあったと考えられる。その意味で、本研究の対象地域・対象農村としては的確といえよう。

「谷津英一家伝来文書群」は、総計約 1,000 点の文書群であった。これらの史料について、破損が甚大で開封ができないようなものを除き、デジタルカメラを用いてデジタル画像化した。そしてその史料データの DVD を作成し、出納が可能な冊子形態の目録を作成することができた。

この「谷津英一家伝来文書群」のなかの、代表的な史料の一部を紹介してみたい。

この史料は、文政元年（1818）5 月付けのものである。

「右訴訟人、横山宿名主七郎兵衛煩ニ付年寄三郎兵衛、八日市宿名主郡蔵奉申上候、私共宿方之儀、甲州道中御伝馬継立相勤候処、甚地狭之場所ニ而宿高弐百石余り有之、不残居屋鋪計ニ而田畑無之、農業之稼之已御伝馬継立并ニ御年貢手当無之、困窮之宿方ニ付、往古ヨリ毎月六度之市~~を立~~御免被　仰付四八之日市相立、在々ヨリ絹紬其外織物類持出し売買仕候ニ付、縞市御運上金年々御上納仕、殊ニ当所米穀銭相~~場~~庭之儀、是又　　御公儀様江御書上被　仰付候儀ニ御座候、尤往古ヨリ諸商人座割相定置、朝五ッ時ヨリ縞市相始メ四ッ時頃迄ニハ相済、夫ヨリ諸商内相始メ宿方在方共ニ用弁仕候、畢竟在村々ヨリ織物類持参仕市場ニ而買方之者へ売渡し右代金を以夫々入用之品買求候ニ付、市場ニ而諸品売払方融通宜敷渡世ニ相成候処、近年織物市立追々遅く相成、在方宿方一同難儀仕候、一体縞仲買共儀者所々ヨリ新規ニ相始候ものハ名前宿役共へ前広ニ相届ケ置駈付次第朝五ツ時ヨリ我勝ニ市場へ罷出上之方ヨリ下之方江居並反物買候故、市立茂自然早朝ヨリ相立候処、近来縞仲買共如何申合置候哉古来ヨリ之規矩相破り、買入座席相定時刻ニ不拘仲買共勝手侭ニ罷出候間、市立茂遅く相成一両年以前ヨリ縞市漸々昼前ニ相始メ終日相懸リ、殊ニ新規仲買共名前宿役人方へ不相届ケ罷出候者も有之不取締リゆへ、折々反物抔紛失仕或者金子間違抔茂度々有之候得共宿役人方ニ而糺シ方行届き兼、売主共無拠損毛仕候義茂有之在宿共難義仕、市場及衰微ニ往々者市御運上納方并ニ奉書上候市相庭ニ郷奇奉恐入候畢竟市延刻仕候ハ、仲買共勝手已ニ而織物類売方之■（消し）もの縞市ニ而終日無益ニ日を暮シ売内出来兼市場及衰微難義至極仕候間、仲買共儀先年之通朝ヨリ駈付次第市相立候様申談候処、相手之者共之儀者、名主役相勤平日縞買入方重立渡世仕候を権威ニ誇り頭取仕兼而相 巧 、当所<u>市場</u>(消し記号)縞市を引、隣村之市場へ縞市相立私欲仕心底ニ而外在方売方之者共申、進メ一同不承知ニ為及宿役人共申談シ候を、一円取用不申割当分市立相休候抔与宿役人共へ申断り、既ニ当月八日之市日同十四日之市日十八日之市日在方之仲買共を差留候間、宿方へ一向不罷出我儘成義いたし方仕、甚難義至極仕候間、無是非今般御訴訟奉申上候、何卒以御慈悲、相手名前之者共被召出、当所之縞市近在之市場ニおいて新規縞市不相企、早朝ヨリ縞市相立、市場衰微不仕候様、

被為　仰付被下置候様奉願上候、以上」

この史料は、これまで『八王子織物史』で紹介されていた事例であるが、谷津家の史料はそれといくつかの箇所の文言が異なっていたことがわかった。さらに、八王子の織物市が、実際に織物生産に携わってはいない谷津家に保存されていたという事実は、当時の市場での出来事が、周辺村落にとって、様々な意味で影響を及ぼしていたであろうこと、さらには都市近郊農村が、積極的に経済情報の収集に当たっていたことを推測させる。

⑵「谷津英一家伝来文書群」に続いて、同じく近世八王子宿の近郊農村である、武蔵国多摩郡犬目村の「小野十九七家伝来文書群」についても、調査を行った。この小野家は、谷津家に比べ、残存文書数は膨大であり、その内容は近世のみならず、近代のものも大量に含まれるものであった。犬目村も、梅坪村同様、八王子宿から１里ほど離れたところに位置しており、経済圏・生活圏は、八王子市を中心としたものであることに変わりはない。

小野家に残存する文書の中で、比較的年代が古い文書を２点ほど例示してみよう。

「　　手形之事

一、　　午ノ御年貢ニつまり申ニ付は、江戸小判三両壱分弐朱之ゆわいニ而永代売渡シ申候、永高之儀ハ百六拾五文、めんわため三十五匁相渡シ申所実正也、悪大豆ハなはニ定申候、たれ人もわきよりいらん申者有敷候、為後日仍如件

承応四年

未ノ二月十八日

うり主　新兵衛

証人　　将助

同　　諸右衛門

杢左衛門殿　　」

この史料は、承応４年（1655）年作成のもので、八王子市域の近世文書としては、古い時期のもので、土地の売買手形であろう。こうした売買に関連した史料は、数多く見られるが、小野家伝来文書群は、中でも時期が古い文書が多く残存している点が特徴的である。

「　　売渡し申田手形の事

一、　　我等名田ニ御前ニ召合永五拾六文免之田、為税と金子弐両鏹三百文請取、右之田方末代相渡申候、後々金子之儀者累年之御年貢未進ニ詰り申ニ付而売渡シ申置候、此田ニ付而、たれ成共わきよりかまい候者御座有間敷候、若左様成儀御座候者、我等罷出急度拵を明可申候、右之御年貢御役等迄組頭方御済可被成候、為後日御前帳改証人を立、手形取上申候、仍如件

明暦三年

酉二月廿五日

主　　九左衛門

証人　重左衛門

小野戸右衛門殿」

この史料も、田の売買証文であるが、作成年代は明暦３年（1657）で近世の初期である。

元来、村々に残されている文書の中で、経済情報を含むものの代表例は、こうした土地の売買関係の史料であるが、これらの史料を時系列に並べることによって、土地の価格の動きが把握できる。その動きが、近世都市の近郊とそうでない場合とが、どのように相違しているのかなどについては、非常に興味深い課題である。

⑶上記のような課題について、今回は取り組むことができなかったが、今後の課題としては非常に大きな問題といえよう。特に、自家の土地の売買に関わるような書類は、非常に大切なものであり、保存されている場合が多いのであるから、経済情報としてとらえ分析していく意味は大きいであろう。

一つのもくろみとして述べておかなければならないのは、近世の初頭においては、土地のランクが上位のものほど、売買価格は高くなっている。すなわち、上田や上畑の方が、下田や下畑よりも高価だと言うことである。しかしながら、近世の後期から幕末にかけては、逆転現象が生じてくる。すなわち、上田や上畑よりも、下田や下畑の方が高い価格で売買されるようになってくるのである。

こうした事実をどのように考えればよいのか。

これらについては、近世社会の経済構造について、より高所からマクロ的な視点を持って考察しなければ成らないことを示しているように思える。

今回の研究は、非常に基礎的な部分に焦点を当てたものであった。今後は、皿に対象地域を広げ、より多くの史料を収集していかなければならないだろう。さらに収集した史料をより深く分析し、広い観点から再度とらえ直すことが重要になってくる。近世における経済情報とはいったい何であったのか。当時の庶民階層なかんずく農民たちが、何を持って経済情報と考えていたのか。興味は尽きない。今後の課題は少なくない。経済情報の収集と蓄積が、いかになされていったのかの解明は、ようやく始まった段階なのではなかろうか。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔その他〕研究会報告等

１，八王子市史研究会
　　発表者：神立孝一
　　発表表題：八王子米市場と地域社会
　　発表年月日：2010 年 8 月 26 日
　　発表場所：八王子市史編纂室

２，八王子市民講座「八王子の江戸時代を探る」
　　発表者：神立孝一
　　発表表題：地域経済から見た歴史
　　発表年月日：2010 年 11 月 5 日
　　発表場所：八王子市クリエイトホール

６．研究組織
(1)研究代表者
　　神立　孝一（KOICHI KANDACHI）
　　創価大学・経済学部・教授
　　研究者番号：60169795